みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　8月　24日　　NO.19

AIの不時着

　学生時代のお話を少し。

　某難関国立大学工学部に通う友人と京都で食事をしていました。３０年ほど前の話です。彼は、大学で「人工知能」を研究していて、将来は研究者になりたいとか言ってました。当時、人工知能の研究なんて、ちょっと変わったことを言う人しか考えていませんでした。

　その帰り、エレベ－タ－で降りているとき、ふと思いついていったのです。

　「このエレベ－タ－のケ－ブルが切れたとして、地面に落ちる瞬間にピョンと飛べば、ケガしないだろう」。ほんの冗談のつもりでした。

　真夜中、築戦前のカギの利かない下宿で一人眠っていました。

　激しく、扉をたたく音がします。びっくりして起き上がり戸をあけると、人工知能を研究している友人が、いっぱいの物理の式を書きこんだカレンダ－の切端を持って立っていました。闇の中でつぶやきます。「あかんで。ケガするわ」。

　その友人は別れてからからずっと、ケガするのかどうかを考えていたそうです。

ところで、夏休みが終わってしまいました。今年は2週間ですから早く感じるもの仕方がないかもしれません。1学期の終業式が終わると本屋に駆け込んだのです。短い夏休みですが、少し本を読もうと気合十分。

家に着くと、なにやらテレビを囲んでドラマを見るとか。

「気合の読書じゃい」と叫んでみたもののだれも聞いていません。

テレビには、北朝鮮の街の様子が。

そういえば、ニュ－スで北朝鮮のリアルな姿がドラマになっていると聞いていたのでした。結局、私の夏休みは、本をほとんど読まず終わりました。

でも、ドラマの最終回は3回も見て、いつも同じところで涙を流したのでした。